

Matrophobia : 母性の闇について
——フェミニズムの視点で読む Katherine Mansfield ——

手塚 裕子*

A Study of Matrophobia:
Reading Katherine Mansfield from a Feminist Point of View

Yuko TEZUKA

Abstract

Matrophobia is the fear of becoming a mother. When a woman realizes she is pregnant for the first time, her reaction is not only joy but also terror. Childbirth is said to be a blessing, but it gives a woman utmost pain and sometimes may lead to her death. Even today some women die during delivery.

Childrearing is the hardest work beyond description. A new born baby cries every three hours. The mother has no time to sleep, eat, or rest. She is forced to give up her career or amusements which she enjoyed before her baby was born. It is certain that a baby is a pleasure, but it is often true that a baby can be a destructive force in its mother's life.

Adrienne Rich, a famous feminist poet says, "every mother has known overwhelming, unacceptable anger at her children." There is no doubt that there is maternal darkness in every mother's heart. Maternal darkness has been neglected for a long time. But now feminism breaks the taboo, destroys the myth of the sacred mother, and cracks the masks of motherhood. In this paper I would like to discuss motherhood, mothering, and matrophobia.

In the first part, several feminist theories about mothering will be introduced. In the second part, mothers in the novels of English writers will be surveyed. Then Katherine Mansfield's *In a German Pension*, where matrophobia is strongly portrayed, will be focused on. Finally I would like to offer an insight into Mansfield's last vision of "our child born of love." Mansfield, who had been suffering from matrophobia, confessed she had a longing for a baby when she was happily in love with her husband. Unfortunately she died before she had a baby, but I think her last vision might lead us toward a new perspective on motherhood.

Key Words: Feminism, Motherhood, Mothering, Katherine Mansfield

*教授 英文学

手塚裕子

はじめに

“Matrophobia”——マトロフォビアとは、自分が母親になるのを恐れることである。初めて、妊娠していることに気づいた女性は、喜びと同時に大きな不安と恐怖を感じる。もし望まない妊娠であった場合、その恐怖はほとんど絶望的である。たとえ待望の妊娠であっても、妊婦となった女性は誰でも、幸福を装いながら、その裏では、日毎に変化していく身体への不安、出産時の苦痛や出血を予想して、大きな恐怖と戦っている。そして、無事に出産を終えた後には、想像を絶する育児が待っている。育児の重圧に耐えかねて、幼児虐待や育児放棄に陥る母親もいる。幼児虐待や育児放棄も、母親になりたくない、母親になるのが怖いという、マトロフォビアの一例と考えられる。本稿では、「母親になること」すなわち“Mothering”に関する数々のフェミニズム批評を顕彰し、文学作品の中に現れた母親像を考察し、最後に、Katherine Mansfieldの*In a German Pension* (1911)を読み、マトロフォビア——母性の闇の部分をも明らかにしてみたいと思う。

1. 母の怒り

現代の若い母親たちは、フェミニズムの洗礼を受けた世代である。昔の女たちは、平均して7～8人の子供を産み、黙々と子育てをしてきたのに、現代の女性は甘やかされて育てられたので、わがままで母親としての自覚に欠けていると批判される。それではまるで、幼児虐待はフェミニズムのもたらした弊害であるかのようだが、Adrienne Richは、*Of Woman Born: Motherhood as Experience and Institution* (1976)の中で、「母親による幼児殺しは、中世から18世紀末にかけての西欧では、よくある犯罪だった」と述べている。さらにRichは、ゲーテの『ファウスト』でも母親による幼児殺しが登場していることを例にあげ、幼児殺しは、1770年から1800年のドイツで「最も一般的な文学的テーマ」であり、子供を殺した女は冷酷な犯罪者としてではなく、絶望に追いつめられた人間として描かれていたという事例を紹介した。

母親による幼児殺しが、中世から連綿とつづいているとするなら、母性そのものの中に、殺意に近いほどの憎悪が含まれていると考えるべきではないだろうか。母性には、聖母のように、自己を犠牲にして、子に尽くす献身的な慈愛にあふれる瞬間もあれば、絶望や憎しみが暴力を誘発し、殺意へと発展する闇の瞬間もあるのではないか。待望の赤ちゃんに、限りない喜びと愛情を感じている母親であっても、昼夜を問わない授乳と排泄物の世話という重労働、行動の自由を奪われ、社会から切り離され、積み重ねてきたキャリアを中断または断念し、大人の話

Matrophobia：母性の闇について

し相手もなく、一日中、狭い家で乳児と共に過ごす監禁生活の中で、睡眠不足からくる疲労が限界に達した時、泣きやまない赤ちゃんに怒りを感じる瞬間は、必ず、訪れる。「母親なら誰でも、自分の子供に、抑えることのできない、許せない怒りを感じることもある」のである。(Rich, 224)

母親は自分の子供に、深い愛を感じると同時に、深い憎悪を感じる。それが、母親の子供に対する感情として、偽らざる真実ではないだろうか。愛という激しい感情の中には、常に憎悪や怒りが含まれている。男女の愛の場合はもちろん、子が親に対する感情にも、愛と憎しみが交錯している。同様に、母の子に対する愛にも憎悪が含まれていても不思議ではないのだが、父権社会は、長い間、母性の闇の部分を隠蔽し、母が子に対して怒りと憎悪の声を上げることが禁じてきた。母の怒りは、父権社会を根底から揺るがすような恐ろしいショックとなりうるからである。だから父権社会は、自分の子を憎むような母親には母親失格の烙印を押し、そのかわりに母の愛を、自己犠牲を厭わない、無償の愛として神格化したのである。

旧約聖書によれば、陣痛の痛みは、イブが犯した罪のために、神から女に与えられた罪¹⁾ということになっている。また、医療の場では、陣痛の痛みは病気ではなく、子を産むプロセスとして必要な痛みなので、心配する必要もなく、叫び声に慄く必要もないと²⁾言われている。こうして、父権社会は、陣痛の痛みを故意に過小評価し、女性の苦しみに同情することもなく、男性は精神的にも肉体的にも苦痛を感じることなく、跡取りとなる子供を手にいれてきたのである。父権社会では、「出産は一種の強制労働」(Rich, 216)なのである。

女たちが、長い沈黙を破り、妊娠、出産、育児に関する恐怖、苦痛を語り出したのは、フェミニズムに負うところが大きい。19世紀後半の婦人参政権運動から始まった女性解放運動は、さまざまな分野で発展し、女性たちは、長い間、封印されてきた母性の闇について、真実を語り始めた。つまり、フェミニズムによって、母親になる力が低下したのではなく、フェミニズムがタブーを破り、もともと母性の中に内包されていた闇が、白日のもと姿を現わしたと考えるべきである。

女たちは、出産の痛み、育児の苦しみ、母親になる恐怖——マトロフォビア——そして、そもそも、なぜ、女だけが母親にならなくてはならないのか、という根本的疑問を投げかける。「女が母親になる」——それは、長い間、自明のことだった。だが、女たちは、その常識を覆して、「なぜ女だけが母親になるのか」を問題視する。

2. 母性からの撤退

Shulamith Firestone は *The Dialectic of Sex* (1971) の中で、生殖機能における男女差が経済的・文化的差異の根底にあることを喝破し、「女性の抑圧の中心は女性が子を産み育てる役割である」“The heart of woman’s oppression is her childbearing and childrearing roles” と考え、女性の解放には子供からの解放が必要であると唱えた。

...we will be unable to speak of the liberation of women without also discussing the liberation of children, and vice versa. (Firestone, 81)

Firestone の立場をさらに先鋭化したのは、Jeffner Allen の “Motherhood: The Annihilation of Women” (1984) である。Allen は、母性は女性の生命を危険にさらすので、すべての女性に「母性からの撤退」“women’s evacuation from motherhood” (326) を呼びかける。母親とは、その肉体を、父権制を存続させるために利用される存在である。父権制が存続する限り、女性たちは、開かれた自由な世界から閉め出される。陣痛は女性に痛みと恐怖をもたらし、事実、出産で命を落とす女性も少なくない。それでも女性が子を産み続ける限り、父権社会は安泰であり、何も変わらない。だからもし、今後20年間、すべての女性が子を産まなくなったら、想像を絶するような新しい思想、価値観が生まれるのではないかと提案する。

At present, and for several thousands of years past, women have conceived, borne, and raised multitudes of children without any change in the conditions of our lives as women. In the case that all females were to decide not to have children for the next twenty years, the possibilities for developing new modes of thoughts and existence would be almost unimaginable. (Allen, 326)

「母性からの撤退」とは、極端な意見のように思われるかもしれないが、現実に今の日本の社会では、これとよく似た事態が進行している。今日の少子化と出生率の低下は、明らかに多くの女性たちが、出産をためらい、または出産を拒否した結果に他ならない。少子化という現実をつきつけられて、政府や企業も少しずつ、育児休業制度を拡充し、保育園の数も増え、父親も育児に参加するようになり、まだ不十分ではあるが、20年前より働く女性の育児環境は改善されている。もしも少子化という現実がなく、女たちが黙って子を産み続けていたなら、

今でも、おそらく子育て支援など考えもおよばなかっただろう。特に、日本の急激な少子化は、海外からも注目され、イギリスの社会学者、Muriel Jolivet は、*Japan: The Childless Society? The Crisis of Motherhood* (1997) の中で、かつては忍従の美徳を誇っていた日本女性が、1990年代以降、急速に子を産まなくなったのは、日本女性の「静かな革命」または「穏やかな抵抗」ではないかと分析している。

However, without being at all aggressive Japanese women are making their silent little revolution, instigating change by what I would call a gentle resistance. (191)

日本だけではなく、欧米先進国では、軒並み出生率は低下している。女たちが、母になることを躊躇し、拒否しているのは、いまや明白な事実である。では、なぜ女たちは、母になることをためらうのか、母になることに、どのような問題があるのか、「母性」についての問題を、掘り下げていくために、前述したフェミニスト批評家であり詩人の Adrienne Rich の *Of Woman Born: Motherhood as Experience and Institution* (1978) を精読してみよう。

3. 母性の仮面を剥ぐ—— Adrienne Rich

Rich は 1929 年にアメリカに生れ、1950 年代のアメリカの家族中心で消費志向の典型的な中流家庭の主婦となり、3 人の子の母となり、育児の現実に直面し、数々の矛盾や不都合を経験する。1975 年、女性詩人の集まりの中で、ふと母親による幼児殺し事件が話題になり、犯人の母親の追い詰められた状況を他人事とは思えないと数人が発言し、そこから堰を切ったように、全員が自分の子に怒りを感じたことがあると告白した。自分の子への怒りを母親が認めるということは、それまでタブーだった。それは、母性の仮面が剥ぎ取られた瞬間だった。その時の様子を Rich は、次のように語っている。

Every woman in that room who had children, every poet, could identify with her. We spoke of the wells of anger that her story cleft open in us. We spoke of our own moments of murderous anger at our children, because there was no one and nothing else on which to discharge anger The words are being spoken now, are being written down: the taboos are being broken, the masks of motherhood are cracking through. (Emphasis added, 24-5)

この会合の翌年、1976年、Richは*Of Woman Born*を出版する。この中で、Richは母性には2種類あり、一つは女の持つ生殖能力と子供との潜在的な関係であり、もう一つは女の能力を男の支配下におくための制度としての母性である。父権制は、制度として確立された母性を必要とする。制度としての母性は女から人間らしい選択や可能性を奪い、女を孤立させ、女の肉体を搾取する。強制労働のような出産、重労働をとまなう監禁生活のような育児という現実の上に、美しい聖母、自己犠牲を貫く献身的な母性という仮面をかぶせて、現実を隠蔽してきたのである。女性の肉体と精神に加えられた父権制の暴力を、Richは、歴史をたどりながら、丹念に解き明かす。そして最後にRichは、制度としての母性を破壊し、男の支配下から女が自分の身体をとりもどした時、女たちは真に新しい生命を想像することができるだろうと、次のように彼女の新しいヴィジョンを語る。

We need to imagine a world in which every woman is the presiding genius of her own body. In such a world women will truly create new life, bringing forth not only children (if and as we choose) but the visions, and the thinking, necessary to sustain, console, and alter human existence — a new relationship to the universe. Sexuality, politics, intelligence, power, motherhood, work, community, intimacy will develop new meanings; thinking itself will be transformed. This is where we have to begin. (285-6)

4. なぜ女が母親になるのか—— Nancy Chodorow 他

心理学者であり社会学者のNancy Chodorowは、*The Reproduction of Mothering* (1978)の冒頭、「なぜ女が母親になるのか？」“Why are mothers women?”と問いかけて、次のように論じる。「女が母になるのは、自然の事実とみなされている。社会科学者にとって自然は事実であり、理論的にみても興味深いテーマではないので、説明も必要としない。しかしながら、ある程度まで、人間の行動は本能的に備わったものではなく、文化的に形成されたものであることを考慮すれば、この前提は疑問である。」(14)そして「なぜ女が母親になるのか？」という問題を考えるために、Chodorowは、妊娠・出産・授乳までのactivityと、子供の養育(childbearing)を区別する。妊娠・出産・授乳は、女性の生殖機能を必要とするため、明らかに生物学的本能的に女性に限定されるactivityであるが、子供の養育は果たして女性に限定される営みなのだろうか？Chodorowは、女性が養育に対する本能的、生物学的適性をもっているかどうか、さまざまな視点から検証した結果、そのような適性を裏付けるような生物学的、心理学的根拠が

存在しないことを証明した。

従って、授乳期以後、子供の養育は生物学的な母でない女性はもちろん、男性でも可能であるはずなのに、なぜ、女性だけが母になることを期待されるのだろうか。Chodorow は、そこに男性が支配する社会の心理とイデオロギーを読み解く。つまり、女が母になることが、性の不平等、性の役割分業の成り立つ基盤となっているのである。

Women's mothering is central to the sexual division of labor. Women's maternal role has profound effects on women's lives, on ideology about women, on the reproduction of masculinity and sexual inequality, and on the reproduction of particular forms of labor power. (11)

エネルギーのほとんどすべてを家庭の外の仕事に注ぎ、育児に携わろうとしない男と、エネルギーのすべてを子育てに費やす女という不均衡な“sex-gender system”は、長い間、父権制を再生産しながら支えてきたが、今日、その“sex-gender system”が女性に押し付けた役割に対して、女性たちから強い不快感と抵抗の意思が表明され、社会の構造の根本的な変化が要求されていると、Chodorow は締めくくっている。

Nancy Chodorow が証明したように、育児に関して生物学的な能力や本能に男女差はないのに、女と男が平等に育児を分担することは、もともと可能であったのに、なぜ長い間、男たちは育児を女におしつけてきたのだろうか。Rivka Polatnick の答えは明快である。“Why Men Don't Rear Children” (1984) の中で、Polatnick は、男が子育てをしないのは、男は子育てをしたくないからであると、一刀両断に論じる。男はジェンダーとして強い立場にいるので、弱い立場の女性に、自分のやりたくない仕事を押し付けたのである。つまり経済的責任の方が、母親業の責任よりも、明らかに好ましいからである。子育ては無報酬で、褒美もなく昇進もないが、もし子供が問題を起せば、必ず母親が批判される。一方、会社で働いて収入を得る男性には、報酬や昇進が待ち受けている。

子育て期間は、職業人としての活動のピーク時と重なる。キャリア形成の途中で、子育てのために仕事を中断することは、大きなマイナスである。子育てをしない男性は、仕事を犠牲にすることなく、子供を手に入れるが、女性の場合、“mother/career conflict”に直面し、子供が仕事かの二者択一を迫られる。高学歴の女性の社会進出が進んでいるとはいえ、今もなお、大企業や政府機関のトップに女性が少ないのは、子育て期間の中断が影響している。男女が本心に平等で個人の能力を発揮できる自由な社会の実現のため、子育てを母親だけに負担させな

い社会的な意識改革, “the sociological understanding of childbearing as a social job” (22) が、必要であると、Polatnick は結論付ける。

Virginia Held は、論文 “The Obligations of Mothers and Fathers” (1984) の中で、Chodorow と同様、子供の親でありながら、母と父では、背負うべき責任の重さが違いすぎることに着目する。父親になった男性に要求されるのは、彼の収入のいくらかを子供のために提供することだが、母親になった女性は、それまで勤めてきた仕事を中断、又は退職し、3時間おきにミルクを求めてなく乳児のために睡眠時間を削り、立つことも歩くこともできない乳児を常に抱きかかえて家事をこなす、不眠不休の重労働が待ち受けている。仕事の後、帰宅して2～3時間、子供と遊ぶのは楽しい余暇の気晴らしだが、毎日、繰り返される育児は、“emotional torment” となりうる。父親と母親の間の育児に対する労働量の差と責任の不平等は、社会的正義と平等を基本とする現代の民主主義国家が是正すべき課題である。Held は、女性と男性が平等に親としての責任と労働を分担できるように、社会の仕組みを変えるべきであると主張する。

We ought to transform the social institution of parenting into one performed equally by women and men. (7)

以上のように、20世紀後半のフェミニスト批評家たちは、心理学、社会学、歴史学、生物学など、さまざまなアプローチを用いて、女が母になるという、今まで当たり前と思われていたことが、実は女を抑圧する性差別の根源であることを証明した。そして、少子化の追い風を受けて、社会もようやく母親だけに育児の負担をかけていた不平等に気づき始め、子育て支援に乗り出した。もちろん前途はまだ多難だが、育児を母親だけでなく父親や広く社会全体で分かち合おうとする方向性が生まれたことは評価できる。しかしながら、Rich が言及した母性の闇については、まだ十分に語られているとは言えない。母の深い愛の中に、子への怒りや憎しみが生まれる瞬間が存在するという、デリケートな問題を扱えるのは、やはり文学である。Rich が母性の闇に言及できたのも、彼女が詩人であったからであろう。次のセクションでは、文学の領域に目を向け、女性作家たちがどのように「母親」、「母になること」、そして「母性の闇」について、文学作品の中で語ってきたのか探求してみよう。

5. イギリス小説の中の母親たち——Austen から Woolf まで

18世紀の小説家、Jane Austen (1775–1817) の場合、彼女の小説は主人公の結婚によって

幕を閉じるので、それ以後の出産や育児は描かれない。脇役として登場する主人公の母親は、*Pride and Prejudice* (1813) の Mrs. Bennet のように、常識的な結婚観を受け入れる平凡な女性であったり、*Emma* (1816) のように主人公の母は既に死亡していたり、母親の存在感は非常に薄い。Austen の時代は、まだ女性が小説を書くということが、タブーだった時代である。世間の偏見や慣習に逆らって、作家という職業を選んだ Austen は、結婚せず、子供も産まなかった。女性作家が結婚して、母となることは難しい時代だったのである。

19 世紀になると、結婚する女性作家も現れ、作品中のヒロインも子を産むようになる。Charlotte Brontë (1816–55) の *Jane Eyre* (1847) の最後の章では、主人公ジェインはロチェスターと結婚し、彼との間に一人息子が生まれている。息子の誕生は二人の結婚の幸福を象徴するが、現実の出産や育児の苦労は全く語られない。Charlotte 自身は結婚したが、妊娠中毒症により 39 才で病死する。Emily Brontë (1818–48) の *Wuthering Heights* (1847) では、主人公のキャサリンは、娘の出産時に命を落とす。Brontë 姉妹の場合、主人公は結婚し出産するが、出産とともに母親が死んだり、観念的な子供の誕生であったり、まだ現実の出産、育児は語られない。だが、作家と主人公が、それぞれ妊娠中や出産時に死亡していることは、母になることへの恐怖——マトロフォビアを雄弁に物語っている。

同じく、19 世紀の George Eliot (1819–1880) の *Middlemarch* (1871–2) では、ドン・キホーテのように時代遅れの理想に向かって邁進する主人公、ドロシアは、最終的に禁じられた愛を貫いて結婚し、一児の母となる。愛する人と結ばれた結末は、ハッピーエンドなのだが、少女時代のドロシアが、社会を改革して世の中のために尽くしたいという高い理想を掲げていたのに、平凡な母親として、夫に尽くして、生涯を閉じたという一文には、一抹の淋しさが漂う³⁾。高い知的能力をもちながら、前途のキャリアを捨てて、母になった女性は、幸福の中に虚無感を感じるのではないだろうか。ジェイン・エアもロチェスターとの禁じられた愛を貫いて結婚し一人息子を産むが、生涯をキリスト教の伝道に捧げたセント・ジョンの死を知って涙を流す。ジェインもまた、セント・ジョンと共に生涯を伝道に捧げるといったキャリアの道を捨てていた。*Middlemarch* も *Jane Eyre* も、主人公が苦難を克服して愛する人と結婚し、母となる物語だが、ハッピーエンドを装いながら、水面下で微妙な虚無感を漂わせることで、キャリアを捨てた女性の淋しさをさりげなく付け加えている。この淋しさは、後に、“mother/career conflict” として、20 世紀以降の女性たちの中心的な葛藤として意識されるようになるものである。

さて 20 世紀に入ると、モダニズムの女性作家の作品には、母性への懐疑、批判、拒否の姿勢が明白に現れるようになる。Virginia Woolf (1882–1941) は、母について繰り返し、回想

録や作品中で語っている。Rich は、Woolf の *To the Lighthouse* (1927) は、「現代文学で今にいたるまで最も深く、情熱的に、母と娘の分裂を描いた。女が自分の母親を中心人物として描写した、非常に数少ない文学作品として意義深い」(Rich, 227) として高く評価している。*To the Lighthouse* の主人公 Mrs. Ramsay は、Woolf の母をモデルとしている。13才で母を失った Woolf は、母という存在に執着し、母の呪縛から逃れるために、母の実像に迫ろうとして母を知る人々から話を聞き、書き上げたのが、*To the Lighthouse* であり、回想録、“A Sketch of the Past” (1939-40) である。“A Sketch of the Past” の中で、「彼女はマドンナと世俗の女性の混合物だった」“She was a mixture of the Madonna and a woman of the world” (105) という証言を得る。つまり、ある時は、ラファエロの聖母子像に描かれたような美しい理想的な母であり、またある時は、育児に苛立つこともある普通の女性なのである。母には8人の子供がいた。大家族を切り盛りする有能な主婦であったが、ついに彼女が一人きりになった時、「ああ決して一人にさせといてくれないことの苦痛といったら！」“Oh the torture of never being left alone!” (105) と叫んだことがあった。それは、家庭の中の天使として教育され、聖母のような母がもらした、生身の女性としての本音が垣間見えた瞬間である。Woolf 自身は、結婚はしたものの健康上の理由から、子供はもたなかった。かわりに彼女は、9編の長編小説と数多くの短編、エッセイ、書評を残した。特に、集中力を必要とする長編を仕上げた後には、精神的に危険な状態に陥ることもあった。それほどの犠牲を払って書き上げる作品は、まさに Woolf にとっての子供であった。生涯、母親にこだわりつづけた Woolf だったが、自分自身が母親になろうとした痕跡は見られない。むしろ母になることを意識的に拒否していたように思われる。Woolf の遺作、*Between the Acts* (1941) では、知的で現代的な母、アイザは、「家庭的なことや所有欲や母性的なことが大嫌い」(25-6) と公言する。

6. Mansfield の *In a German Pension* に見るマトロフォビア

Woolf の友人でありライヴァルであった Katherine Mansfield (1888-1923) も、母に憑かれた女性作家である。彼女の自伝的作品、“At the Bay” (1921) に登場する母リンダは、Mansfield の実の母親をモデルとしている。リンダは生死の境をさまようような苦しい難産を、何回も繰り返すうちに、「彼女は破壊され、弱くなり、勇気はくじかれ、耐えがたいことには、自分の子供を愛せなくなった」“She was broken, made weak, her courage was gone, through childbearing. And what made it doubly to bear was, she did not love her children.” (453) と、自分のマトロフォビアを告白する。

Matrophobia：母性の闇について

Mansfield も子供はいないが、彼女は不本意な妊娠、流産という苦い経験をもっている。難産に苦しみ、妊娠と出産に怯えていた母親の記憶の上に、Mansfield 自身の苦い経験を重ね合わせ、最初の短編集、*In a German Pension* (1911) には、妊娠、出産への懷疑、嫌悪、拒否など、マトロフォビアの特徴が明確に描かれている。次に、Katherine Mansfield の *In a German Pension* を読んでみよう。

1908年、20才の Katherine Mansfield は、作家を志して故国ニュージーランドを飛び出してロンドンへ向かう。そこで同じニュージーランド出身の音楽家ガーネット・トラウエルと恋に落ちるが、何らかの理由で二人は別れる。その直後、Mansfield はジョージ・パウデンと突然結婚するが、やはりガーネットが忘れられず、新婚の夫を置いて、ガーネットの後を追いかけて、一旦、二人は結ばれるが、またもガーネットは去ってしまう。残された Mansfield は、妊娠に気づき、途方にくれる。一方、ガーネットは、別れた後、何の変化もなく、また別の女性と恋愛を繰り返す。夫の子供ではない子を妊娠したままでは、夫のもとに帰れない Mansfield は、焦り、悩み、変化していく自分の肉体への不安を一人で抱え込んでいた。心配した母親がニュージーランドから駆けつけ、母は Mansfield を連れてドイツの保養地ババリアへ赴く。そこで秘密裏に出産し、子供は養子に出す予定だったのだが、その妊娠は流産に終る。快楽を共有したガーネットには、何の苦痛も咎めもないのに、Mansfield は、大きな精神的、肉体的苦痛を経験し、ふしだらな娘として母親から厳しく叱られ、母は彼女を遺産相続人リストから抹消してしまう。Mansfield は心身ともに大きく傷ついたが、ドイツでの経験をもとにして短編集 *In a German Pension* を書く。この短編集の中には、恋愛が成就して性体験を共有した男女のその後のあまりに大きな違い、女の苦しみと男の鈍感という不条理なまでの不公平が、皮肉なタッチで淡々とスケッチされている。

“The Modern Soul” の冒頭、Herr Professor は語り手である私の隣に座って、チェリーを食べながら、どのチェリーにも虫が入っていることを嘆いて、次のように言う。「もし自然の欲求を満足させたいと思うなら、自然の結果を無視できるほど強くなくてははいけません」(42) 確かに、自然の欲求=性欲を満たしても、自然の結果=妊娠を無視できる強さが男には与えられている。彼は、チェリーの種を吐き出し、数十年後には、その種から芽が出て、このあたりがチェリーの果樹園になっているだろうと言うが、まさに男にとって子供というのは、無責任に種をまき散らしておけば、自然に生れて、彼の知らないうちに成長していくものである。いっしょに自然の欲求を満たした女性には、妊娠の不安、出産の苦痛、育児の重労働が待ち構えているというのに、男は女の苦しみに対して全く鈍感である。

In a German Pension に収められた多くの短編の中で、男たちはよく食べる。“The Baron” の

男爵は、食欲以外に興味をもたないし、“Frau Brechenmacher Attends a Wedding”の Herr Brechenmacher も妻には目もくれず、よく食べたり飲んだりしている。男にとって、食欲と性欲は、快感を与えてくれる安全な自然の欲求なのである。

結婚している男たちは、妻の出産につきあうことになるが、男たちは妻の陣痛の苦しみには全く鈍感で身勝手である。“A Birthday”の Andreas は、妻の陣痛が始まった日の朝、家中の女たちが妻の世話にかかりきりになって、彼の世話をないがしろにして、朝食の準備もできていないことに不満を感じる。徹夜で陣痛の痛みに耐えていた妻に対する思いやりもなく、自分が風邪気味で喉が痛いことを気にするような幼稚なエゴイストである。妻のうめき声が聞こえてくると、Andreas は恐怖に怯える。“frightful business”とつぶやき、彼を怯えさせた妻に腹を立てる。まるで駄々っ子のような Andreas の態度に呆れた女中は、「私は子供を産んでやるもんか」(71)と誓う。妻の陣痛にうんざりしていた Andreas だが、次は男の子が生まれるかもしれないと思うと、途端にうれしくなる。彼の会社の跡取り息子が生まれれば、将来は息子と二人で会社を大きくすることができる。Andreas と妻は結婚して4年、既に女の子を二人授かっているが、彼が本当に欲しいのは、息子である。ふと Andreas は、婚約時代の妻の写真を見て、そのあまりの変化に驚く。4年前の若々しい女性は、妊娠、出産、育児、家事に追われて、結婚前の若さと生気を失い、すっかり、やつれて老けてしまった。「結婚は、男の場合より女をひどく変えるものだ」“Marriage certainly changed a woman far more than it did a man” (74) 彼は、妻の変化の原因が自分にあるとは夢にも思わない。鈍感な彼は、いつまでも子供のままである。

陣痛のうめき声は、夫を怯えさせたが、まだ結婚前の若い娘も、妊婦の苦しみや醜い体型に嫌悪感や恐怖を感じる。“At Lehman’s”の Sabina は、レイマンの店に奉公に来たばかりの若い女中である。或る日、妊娠中の女主人の陣痛が、2階の部屋で始まる。Sabina は、夫人の足にできた青い静脈瘤、やつれた容姿、のろのろとした歩き方、苦しそうな呻き声を聞くと、「いつか自分もあんな体つきになって、あんなに苦しがるなんて嫌だと思う」(55)しかし、ベビー服を着て、膝の上でピョンピョン跳ねる赤ちゃんは、可愛いと思う。Sabina も Andreas と同様、出産の苦しみを嫌悪して、赤ちゃんの可愛らしさだけに目をむけているが、永久に出産の苦しみから目をそらしてられる Andreas と違って、Sabina も、その苦しみを知る時が確実に近づいている。店に来た若い男の客は、あからさまに Sabina に興味を示し、性的に誘惑する。突然、男にキスされた彼女は、初めて官能の眩暈を感じる。しかし、その時、夫人の陣痛の最後のものすごい呻き声が聞こえ、男が驚いた隙に Sabina は無事に逃げ出す。しかし、彼女が一瞬の性の快樂の後に、妊娠し辛い陣痛を伴う出産を繰り返し、若さと美しさを失っていくの

は、もう時間の問題である。

“The Child-Who-Was-Tired” は、育児に疲れて、正気を失い、赤ちゃんを殺してしまう悲惨な話である。主人公の疲れた子は、まだ幼い奉公人である。子守の仕事の他に、炊事、洗濯、掃除も任され、ほとんど眠ることもできず、疲れきっている。疲れた子は、襲ってくる睡魔とどう戦っていいかわからなかった。朦朧とした意識の下で、主人と奥さんの姿が途方もなく大きく膨らむように思われた。赤ちゃんは全然寝ないで泣き続きける。疲れた子の体力は限界にまで近づいているのに、主人は情け容赦もなく、「赤ちゃんを泣かせたら、おまえをひどいめにあわせるぞ」と脅かす。「聖母マリアだって、この子を泣きやませることはできないと思うわ」と疲れた子は、つぶやく。(85) 赤ちゃんはまた大声で泣き出し、追い詰められた子は、奥さんの枕を赤ちゃんの顔に押し付け、窒息死させてしまう。そして彼女自身も疲労のため、倒れて意識を失い、死が暗示される。

疲れた子の女主人は、毎年のように赤ちゃんを産む。絶え間ない妊娠が彼女の体力を弱らせ、苦しめている。彼女もまた父権制の被害者なのだが、育児と家事の負担をすべて、疲れた子に押し付けて、追いつめていく加害者でもある。父権制の価値観に囚われた女は、被害者であると同時に加害者にもなりうる。

“Frau Fischer” のフィッシャー夫人は、おせっかいで保守的な中年女性である。語り手の「私」が、船乗りの夫と離れて、一人でドイツのペンションに滞在していることに目をつけ、夫の心をつなぎとめるために、子供を産みなさいと、無神経にも、「私」の心の中に土足で踏み込む。「あなたに必要なのは、たくさんの子供です」“handful of babies, that is what you are really in need of.” (32) しかし「私」は、「子供を産むことは、あらゆる職業の中で最も不名誉なものだと思います。」“I consider child-bearing the most ignominious of all professions.” (31) と切り返す。たくさんの子供を産み育てることが、どれほど女の心と肉体に負担をかけるものか、フィッシャー夫人も経験して知っているはずなのに、父権制の価値観の中にとりこまれていた夫人は、その苦痛を忘れてしまったのか、あるいは、苦痛を苦痛として認識できなかったのか、あるいは、自分が耐えてきた苦痛を若い女性に強要することで、自分を優位な立場に置きたかったのか、夫人は子供のいない「私」に、子供を産むよう、しつこく勧める。若い女性を「強制労働のような出産」へと駆り立てるのは、男だけではなく、フィッシャー夫人のような女の共犯者のプレッシャーも見逃すことはできない。

7. 愛から生まれた子のヴィジョン——Mansfieldの晩年

*In a German Pension*の中に、妊娠、出産、育児について、絶望的なまでに否定的なヴィジョンを描きだしたMansfieldだったが、望まない子供を流産した後、奇妙なことに強い喪失感に苛まれる。Mansfieldは、生れてこなかった赤ちゃんの代りとなるような子供を求めて、親友のIdaにイギリス人の子供を探してもらう。チャーリーという名の8才になる貧困家庭の病気の少年は、首のまわりにラベルを下げて、一人でロンドンからドイツのパバリアに来て、MansfieldをSallyと呼び、夏の数カ月を二人はともに過ごす。(Claire Tomalin, *Katherine Mansfield: A Secret Life*, 70) 作品の中では、一貫して、出産、育児を拒否してみせたMansfieldだったが、なぜ、見知らぬ少年と疑似親子を演じる必要性に迫られたのだろうか。彼女の矛盾した行動は、理論では割り切れない母性の複雑さを現していると言えるだろう。

1911年12月に、*In a German Pension*を出版した後、Mansfieldは生涯の伴侶となる批評家で文芸誌の編集者のJohn Middleton Murry (1889-1957)と出会って同棲し、前夫との離婚成立後、二人は1918年に正式結婚する。Murryとの結婚生活も愛憎が交錯する波乱に富んだものだったが、それでもMurryはMansfieldが最も愛した夫だった。Murryと結婚した頃、Mansfieldは結核の症状が悪化して咯血が始まり、死の恐怖に怯えるようになったが、その頃から彼女は、赤ちゃんが欲しいと言うようになる。1918年6月8日の夫宛の手紙には、「私は病気です。私はあなたに会いたい。私たちの家、私たちの人生、そして赤ちゃんを求めます。」
"I feel 'ill' and I feel a longing, longing for you: for our home, our life, and for a little baby."と書き、1919年11月23日の夫宛の手紙には、子供について長い手紙を書いている。

You know people are impossible to understand. I think I only understand you of all the world. We must have children — we must. I want our child — born of love — to see the beauty of the world — to warm his little hands at the sun & cool his little toes in the sea. I want Dickie to show things to. Think of it! Think of me dressing him to go for a walk with you. Bogey, we must hurry — our home — our child — our work.

Mansfieldが求めた赤ちゃんは、父権制を存続させるための跡取り息子ではない。その赤ちゃんは、太陽の光で小さな手を温め、海の水で足先を冷やし、世界の美しさをみるために、愛から生まれる子供である。それは、前述したAdrienne Richが*Of Woman Born*で述べたように、制度としての母性を打破し、女が自分の身体を取り戻した後、女たちによって創造される真に

新しい生命の誕生と同一のヴィジョンと考えてもよいだろう。

Mansfield は、小説を書く時に二つの動機があると、1918年2月3日の夫宛の手紙に書いている。一つは、もともと彼女の中に内在していた動機で、それは、「すべてが破滅する運命をたどるような深い絶望感」“extremely deep sense of hopelessness, of everything doomed to disaster”, 「墮落に対する叫び声」“a cry against corruption”であり、もう一つは、Murry との愛によって獲得した「真の喜び」“real joy”と「完璧なまでの幸福感」“that state of being in some perfectly blissful way at peace”である。Murry と出会う以前に書かれた *In a German Pension* は、妊娠、出産、育児という「墮落」に対する叫び声であったが、Murry と出会って、真の喜びと幸福を得たとき、Mansfield は、彼との愛から生まれてくる子供を求めたのである。

しかし、Mansfield の結核は、ますます悪化し、彼女は Murry との愛の子どもを妊娠することなく、34才の若さでこの世を去る。だが、制度としての母性のもとで、妊娠、出産、育児が女たちを苦しめ、破壊していくこと、男たちの鈍感さとエゴイズム、男に加担する父権制に取り込まれた女たちのプレッシャーを、冷徹なリアリズムと皮肉な嗤いで告発した Mansfield が、最後にマトロフォビアを克服し、「愛から生まれた子」のヴィジョンへと到達したことの意義は深いと思う。

Notes

- 1) 『旧約聖書』創世記3章16節によれば、蛇の誘惑に屈して神に背いたイヴに対して、神は次のような罰を与える。「わたしはあなたの産みの苦しみを大いに増す。あなたは苦しんで子を産む。それでもなお、あなたは夫をしたい、彼はあなたを治めるであろう」。
- 2) Hemingway の “The Indian Camp” では、難産の女性に帝王切開の手術を行う場面で、父親である医師は、息子に女性の叫び声は重要でないから気にしないようにと注意する。“But her screams are not important. I don't hear them because they are not important.” (18)
- 3) *Middlemarch* の最後の章には、ドロシアの才能を惜しむ人々の声が間接的に紹介されている。Many who knew her (Dorothea), thought it a pity that so substantive and rare a creature should have been absorbed into the life of another, and be only known in a certain circle as a wife and mother. (576)

Works Cited

- Allen, Jeffner. “Motherhood: The Annihilation of Women”, *Mothering: Essays in Feminist Theory*, Ed. Joyce Trebilcock, Rowman & Allanheld, 1984, pp.315-330.
- Austen, Jane. *Pride and Prejudice*, 1813, Cambridge Univ. Press, 2006.
- . *Emma*, 1816, Cambridge Univ. press, 2005.

- Brontë, Charlotte. *Jane Eyre*, 1847, Everyman's Library, 1997.
- Brontë, Emily. *Wuthering Heights*, 1847, Oxford World Classics, 1998
- Chodorow, Nancy. *The Reproduction of Mothering*, Univ. of California Press, 1978.
- Eliot, George. *Middlemarch*, 1871-2, Norton & Company, 1977.
- Firestone, Shulamith. *The Dialectic of Sex: The Case for Feminist Revolution*, Jonathan Cape, 1971.
- Held, Virginia. "The Obligations of Mothers and Fathers", *Mothering: Essays in Feminist Theory*. Ed. Joyce Treblicot, Rowman & Allanheld, 1984, pp.7-20.
- Hemingway, Earnest. "The Indian Camp" *The Nick Adams Stories*, 1925, Charles Scribner's sons, 1972, pp.16-21.
- Jolivet, Muriel. *Japan: The Childless society? The Crisis of Motherhood*, Routledge, 1997.
- Mansfield, Katherine. *In a German Pension*, 1911, Penguin, 1987.
- . *The Collected Letters of Katherine Mansfield, Vol.3*, Ed. V. O'Sullivan & M. Scott, Clarendon Press, 1993.
- . *The Letters and Journals of Katherine Mansfield*, Ed. C.K. Stead, Penguin, 1977.
- . *The Stories of Katherine Mansfield*, Ed. A. Alpers, Oxford Univ. Press, 1984.
- Rich, Adrienne. *Of Woman Born: Motherhood as Experience and Institution*, 1986, New Edition, Norton & Company, 1995.
- Poltnick, Rivka. "Why Men Don't Rear Children: A Power Analysis", *Mothering: Essays in Feminist Theory*, Ed. Joyce Treblicot, Rowman & Allanheld, 1984, pp.21-40.
- Tomalin, Claire. *Katherine Mansfield: A Secret Life*, 1987, Penguin, 1988.
- Woolf, Virginia. *Between the Acts*, 1941, The Hogarth Press, 1976.
- . *Moments of Being: Unpublished autobiographical Writings*, Ed. J.Schlkind, 1976, Triad Grafton Books, 1986.
- . *To the Lighthouse*, 1927, Everyman's Library, 1978.